

主な田端 文芸芸術家たち



芥川龍之介 書斎風景

や・わ行

山田 敬中(やまだ・けいちゅう) 明治元年(1868)～昭和9年(1934) 日本画家
東京台東区出身。田端407(現1-23)番地に在住(転入年是不詳)。川端玉章に師事し、圓山派の画風を学ぶ。文展などに作品を発表、多くの受賞に輝く。東京美術学校教授、帝展審査員を歴任。滝野川町議会議員を2期(大正10年～14年)務めた。

山田 順子(やまだ・じゅんこ) 明治34年(1901)～昭和36年(1961) 小説家
秋田県由利本荘市出身。大正13年および昭和2年頃、田端に居住。20歳で結婚するも自作小説を携えて秋田から上京し徳田秋声に師事、大正14年に『流るるままに』を出版したが、徳田秋声や竹久夢二などと同棲するようになる。秋声作品のモデルとしても知られる。

山手 樹一郎(やまて・きいちろう) 明治32年(1899)～昭和53年(1978) 小説家
栃木県黒磯町出身。生後まもなく父の転任に伴い田端の鉄道官舎に転入し、大正13年まで居住。博文館で『譚海』編集長などを務めるかたわら大衆小説の執筆を行い、昭和15年、初めての新聞小説「桃太郎侍」が人気を得る。戦後も数多くの時代小説を書き続け、“貸本屋のベストセラー作家”の異名を取った。



山本 鼎(やまもと・かなえ) 明治15年(1882)～昭和21年(1946) 洋画家・版画家
愛知県出身。明治44年田端512(現3-24)番地に転入、大正6年500(現2-10)番地に転居。石井柏亭、森田恒友らと雑誌『方寸』を創刊。大正元年から5年まで滞欧。帰国後、再興美術院洋画部同人となる。大正8年、長野県に日本農民美術練習所(後に研究所と改称)を設立、自由画運動推進など多方面に功績を残す。大正11年、春陽会結成に参加。夫人は北原白秋の妹・家子。

柚木 久太(ゆのき・ひさた) 明治18年(1885)～昭和45年(1970) 洋画家
岡山県倉敷市出身。大正元年、田端・ポプラ坂下に転入、大正4年、田端609(現5-9)番地にアトリエを築き転居。明治40年、太平洋画会研究所に入り、瀧谷国四郎・中村不折に師事。明治44年、ヨーロッパに留学。文展、帝展に連続して特選。帝展・日展審査員。新世紀美術協会創立に参画。



吉田 三郎(よしだ・さぶろう) 明治22年(1889)～昭和37年(1962) 彫刻家
石川県金沢市出身。明治40年、石川県工業学校の師である板谷波山を慕い上京、田端142(現3-14)番地の「大盛館」に下宿。明治45年、田端105(現3-20)番地に転居。東京美術学校時代の同級に建島大夢、北村西望、斎藤素蔵がいる。昭和6年、古代彫刻研究のため文部省から欧州視察を命じられ各国を巡歴。日本芸術院賞受賞。日本芸術院会員、文展・帝展・日展審査員など歴任。同郷の室生犀星が不遇の頃、物心両面の援助者でもあった。

吉田 白嶺(よしだ・はくれい) 明治4年(1871)～昭和17年(1942) 木彫家
東京都墨田区出身。明治43年、田端155(現3-16)番地に転入。独学で木彫を修め、日本彫刻会に参加。大正3年から再興日本美術院展を活動の場とし、同人に推される。また、山本鼎らの農民美術運動に参画。鹿島龍蔵、芥川龍之介らの「道閑会」のメンバー。



吉村 芳松(よしむら・よしまつ) 明治19(1886)年～昭和40(1965)年 洋画家
東京都出身。田端100(現3-21)番地に居住。東京美術学校西洋画科卒。美校在学中から同校先輩の田辺至らと田端にある光明院に下宿。卒業後も光明院敷地内にアトリエを構える。長きにわたって田端で制作活動を行い、帝展・文展・日展に出品。昭和30年、柚木久太らと「新世紀美術協会」を創立。

脇本 楽之軒(わきもと・らくしけん) 明治16年(1883)～昭和38年(1963) 美術史学者
山口県出身。大正10年、田端に転入(詳細不明)。国文学、美術史を学び、大正4年、美術研究会を創立し、本格的に美術史研究を始める。文部省帝国美術院付属美術研究所の嘱託として活躍。東京芸術大学教授、国宝保存会委員等を歴任。